

Title	魔界の住人 川端康成 : その生涯と文学
Author(s)	森本, 穂
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/55691">https://hdl.handle.net/11094/55691</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏名 ( 森本 穂 )

論文題名

魔界の住人 川端康成 ——その生涯と文学——

本論は、川端康成の全生涯にわたる行動と作品を丹念にたどることによって、川端康成という人間像の全貌と、その精神、内面の軌跡を明らかにしようと試みたものである。評伝的手法と、作品論の積み重ねという二つの方法を併用することによって、物心ついてから、その死に至るまでの内面の推移を、巨視的に、かつ微細に追究しようとした。また、川端康成の創造の源泉となり、康成を創作へと導いた根源的な欲求、衝動を〈美神〉と名づけ、その〈美神〉がどのように康成を導いて豊饒な作品群を生み出したかを、探ろうとした。

川端康成の残したおびただしい創作群を見てゆくと、とりわけ太平洋戦争の戦時下から敗戦後まもない時期までの間に、一つの大きな断層のあることが認められる。その断層の時期は、創作力が枯渇したというのではなく、むしろ、戦後の異常に鮮烈華麗な、生涯の最高峰をなす傑作群を花咲かせるための準備期、蓄積のための沈潜期であったと考えられる。

では、戦後の異様なほどの豊沃な傑作の数々は、いかに形成されたのか。

1968年——今から47年前、ノーベル文学賞受賞の記念講演「美しい日本の私」に、室町時代の禅僧一休の偈頌(げじゅ)「仏界入り易く、魔界入り難し」が引用された時、わたくしは、この一句が川端文学の本質を衝いたものではないかと直感した。以後、この仮説を検証してゆくと、川端康成戦後の「住吉」連作、「山の音」「千羽鶴」「みずうみ」「眠れる美女」「たんぼぼ」といった代表作が、〈魔界〉の言葉でことごとく説明され得るのだ。

そこで本論においては、川端文学における〈魔界〉の構造を明確にし、その抛って来たる根源を探り、これを分かりやすく読者に提示することに努めた。(その内容については、後述する。)

50余年にわたる川端文学の流れを大まかに分類すれば、〈魔界〉の準備期たる戦前と、〈魔界〉文学の開花期たる戦後とに分けることができるだろう。以下、その推移を、概観してゆこう。

川端康成は明治32(1899)年、大阪市内に生まれた。しかし満1歳半に父を結核で失い、満2歳半で母を同じ病で失った。そこで父方の祖父母が康成を連れて川端家祖先伝来の地、茨木市宿久庄に帰り、育んだ。

人間の物心は、普通、満3歳前後に発するという。康成は、それ以前に両親を失ったのだ。だから康成に両親の記憶はない。また、祖母、たった一人あって他家に育てられた姉芳子も、数年のうちに死んだ。このため康成は、祖父三八郎と二人だけで世間から隔絶した少年時代を過ごし、数え16歳で三八郎が死ぬと、天涯孤独の身となった。この祖父の死の直前の日々を写生した日記が、後年、「十六歳の日記」として発表される。この作品の冒頭に記された、中学校から帰宅した時の自宅の異様な静まりに「寂しさと悲しさ」を感じた、という素朴な表現こそ、生涯にわたる康成の基本感情であり、この孤絶の意識が、後の〈魔界〉の基底を形成する意識となった。

母の実家である伯父の黒田家に引き取られた康成は、1年ほどで茨木中学の寄宿舎に入る。そこで、清野少年との愛情生活を経験した。このころ、すでに自分が〈孤児〉であることを自覚し、孤独の極みにあった康成は、清野少年の愛情によって救われる。

中学時代の康成に、見逃せない京都漂遊の一夜の経験がある。吉井勇の短歌、長田幹彦の小説によって京都祇園の舞妓、芸妓の世界に憧れていた康成は、一人、京都の街を彷徨して、憧憬を現実化しようとしたのだ。のちの「伊豆の踊子」の旅芸人や、「浅草紅団」の踊子につながる行動である。

大正6(1907)年、上京して一高に入学した康成は、翌年秋、一人で伊豆に旅して旅芸人一行とともに旅をする。この稀有の経験が、大正11年夏の未定稿「湯ヶ島での思ひ出」を経て、大正15年の「伊豆の踊子」に結晶する。

大正8年、一高寄宿舎の仲間と、本郷のカフェ・エランに連日のごとく通った康成は、カフェで働く伊藤初代に激しい恋心を燃やした。初代は会津若松市に生まれ、母を早くに失い、岩手県岩谷堂(現・江刺市)を郷里とする父とも別れて、尋常小学校3年を終えただけで上京した少女であった。自分と同類、あるいはそれに近い境遇の少女に恋心を燃やすというのが康成の恋愛の型だ。事情により、岐阜市の寺に養女として引き取られた初代をもとめ、友人の助力もあって、康成は翌々年の大正10年秋、岐阜で初代との婚約に漕ぎつける。しかし一ヶ月後、初代から「非常」

の手紙がきて、康成の恋は破れた。しかし初代への想いは長く尾を引いた。この体験が「南方の火」「篝火」「非常」「彼女の盛装」など、一連の作品群を生む。また初代に寄せる恋慕の情を綴った日記は、敗戦後の昭和23（1948）年の第一次川端康成全集の「あとがき」にも発表される。康成のほとんど全生涯を覆った恋愛の記憶であった。

この前後、東大系列の同人雑誌、第6次『新思潮』を刊行して菊池寛の知遇を得、大正10年、「招魂祭一景」によって文壇に登場した康成は、横光利一らと『文藝時代』を刊行して新感覚派と呼ばれ、文藝時評や評論によっても文壇に確たる地位を築いた。

「水晶幻想」（昭6）、「父母への手紙」（昭7～9）、「抒情歌」（昭7）、「禽獣」（昭8）などの小説、「末期の眼」（昭8）、「文学的自叙伝」（昭9）の評論に、さまざまな試みの跡や、芸術と死についての洞察が示されている。

昭和10年から各誌に分載され、昭和12年に一度刊行されたのち、さらに書き継がれて、戦後の昭和23年に決定版が刊行された「雪国」は、視点人物島村を「美が虚無の光をあげて透過する」（小林秀雄）作品であり、この時期に康成が到達した美と虚無の主題が巧みに表現されている。「名人」（昭17～29）も、芸術と死との深い関わりを描いた秀作であるが、その完成形には諸説がある。わたくしは、康成が生前に選んだものを選ぶ。

康成の〈美神〉の系列を考える上で注目すべきなのは昭和15年に発表された「母の初恋」である。伊藤初代への想いは、昭和7年の再会によって崩れたが、その身代わり（形代）（かたしろ）によって愛されたいという康成の願望が、その娘を養女とする、という発想を生んだ。これは、昭和18年に、母方の血を引く黒田家の娘政子を養女としたことによって、新たな展開を見せる。康成は少年のころ、黒田家の従姉玉子に憧れた。その血を引き、かつ、薄幸の影をもつ政子が我が家に来たことにより、康成の〈美神〉は、伊藤初代から政子へと移った。その愛と罪障感が、戦後の〈魔界〉文学を生む一つの要素となる。

太平洋戦争の勃発は、康成に大きな内的変化をもたらした。一つは日本の古典を耽読したことである。「東海道」に描かれたように、室町期の連歌師飯尾宗紙や足利九代將軍義尚に親炙して中世文学の本質に開眼した。また源氏物語を湖月抄によって読破した。

いま一つは、敗色を濃くする戦況を深く悲しみ、「英霊の遺文」や「日本の母」に悲痛な心境を吐露したことである。敗戦間際の昭和20年4月には、海軍特攻基地鹿屋に報道班員として派遣され、特攻兵の飛び立つさまを、つぶさに目撃した。さらに「故園」において、少年時代の祖父の記憶を克明にたどった。

敗戦は、康成に深い衝撃をもたらした。敗戦の二日後に病死した島木健作追悼文において「私の生涯はすでに終わったと、今は感ぜられてならない。（中略）私はもう死んだ者として、あはれな日本の美しさのほかのことは、これから一行も書かうとは思はない」と宣言し、また「哀愁」（昭22）には「敗戦後の私は日本古来の悲しみのなかに帰ってゆくばかりである。私は戦後の世相なるもの、風俗なるものを信じない」と書いた。

この深い悲しみと、日本伝統の美への回帰が、戦後の〈魔界〉文学誕生の端緒となる。

昭和23年から翌年にかけて発表された「住吉」連作の「反橋（そりはし）」「しぐれ」「住吉」は、康成が〈魔界〉に入った最初の作品群である。老残の主人公行平（ゆきひら）が告白する生涯の物語は、源氏物語須磨明石の巻の影響を受け、漂泊と母恋いと形代を主題とする。折口信夫の提起した、貴種流離譚の変型であるといつてよい。

孤絶の悲しみ、美への憧れ、罪障感、醜さの自覚など、〈魔界〉の四要素を内包している。

つづく「山の音」（昭24～29）、「千羽鶴」（昭24～29）は、前者を「末期の夢」の物語、後者を「夢魔の跳梁」の物語と呼ぶことができよう。「山の音」の尾形信吾は、物語の冒頭近くで山鳴りの音を聴き、死を告知されたと思う。その信吾が、長男の嫁菊子に慕情を寄せるのだが、信吾の内面の欲望は抑制されて表面には露わに出てこない。しかし「千羽鶴」では、欲望が解き放たれたかのように表出し、まことに夢魔のように、倫理観が蹂躪され、妖しい絵巻が繰り広げられる。「山の音」の信吾には、少年時代に憧れた従姉への慕情があり、その形代として菊子が愛された。このように両作品にも、源氏物語の影響が色濃く表れている。〈魔界〉は「千羽鶴」に底流する。

「みずうみ」（昭29）は、中年男桃井銀平が主人公である。彼は美しい女性を追って人生を彷徨する。この作品こそ川端文学の最高峰であり、また銀平には、〈魔界〉を構成する要素がすべて備わっている。早くに父親を失い、肉親に縁の薄い孤絶のかなしみ、そこから必然的に生ずる、女性への憧憬と渴望、世の道德に違反しているという罪障感（悪の意識）、激しい劣等感（醜の意識）……。銀平は人生の底に墮ちてゆきながら、そこから美の世界への憧憬をつのらせる。戦慄をともなう〈美〉を描出した作品であるが、作品に、深いかなしみが底流している。梅原猛が指摘するように、会者定離（えしゃじょうり）のかなしみがある。肉親や知友を多く失ってきた康成の意識が投影されているのであろう。

「眠れる美女」（昭35～36）は、眠り薬で眠らされた全裸の少女と一晚を過ごす宿がある、という設定の作品である。前衛的な手法ともいえるが、底にあるのは、老人の、若い生命にたいする渴仰である。ここには女性への渴

望はあっても、女性の人格は失われている。さらに「片腕」（昭38）においては、片腕だけが欲望の対象となる。人格は完全に喪失している。康成の〈魔界〉の衰微が、これらには窺われる。

「片腕」と同じ時期、康成は11編の「掌の小説」を発表していた。これらには、死への憧れ、死の願望が濃厚に描かれている。なかでも「不死」は、祖父三八郎と康成自身を重ねて主人公の老人とし、若い娘との心中を主題としている。

康成晩年の大作「たんぼぼ」（昭39～43）は、〈魔界〉の再構築をめざした大胆な挑戦であった。源氏物語の掉尾を飾る浮舟物語を下敷きとし、多くの能の主題を踏まえつつ、二人の男に愛されて苦しむ木崎稲子を描く。登場する木崎中佐と西山老人は、ともに康成の分身である。成長して伴侶を見つけ、自分のもとから去ってゆく養女政子への執着を根底のテーマとする物語だ。

晩年の康成は、円谷幸吉選手の遺書に異常な共感を示したように、一步一步、死に近づいてゆく道程をたどる。それは、康成の初期から一貫する道のりでもあった。昭和46年11月に発表された「隅田川」は、「住吉」連作の、22年間の空白をおいた続編である。そのなかで康成は心中への願望を語り、老いの孤独のきわみを描いた。康成が自裁したのは、わずか半年後の、昭和47年4月であった。

なお、自裁の5年後、白井吉見が「事故のてんまつ」を発表した。明らかに康成と分かるノーベル賞作家が、自家のお手伝いさんに恋着して断られ、死を選んだというモデル小説だった。世間の耳目を集め訴訟事件にまで及んだが、真偽不明のまま30数年を経過した。今、究明しておかないと真偽が曖昧なままに終わる。そこで当時の文献を博捜し、また現地調査を行って、「事故のてんまつ」の真と虚の部分を峻別した。「エピローグ」の最後に、わたくしの最終判断を提示している。

また本書においては、これまで等閑視されがちであった、新聞や婦人雑誌連載の、戦後の中間小説群「虹いくたび」「舞姫」「日も月も」「川のある下町の話」「東京の人」「美しさと哀しみと」を取り上げ、それぞれに評価を加えた。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 森本 稔 )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	出原隆俊
	副 査	大阪大学 教授	加藤洋介
	副 査	大阪大学 准教授	斎藤理生
<b>論文審査の結果の要旨</b>			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 魔界の住人 川端康成 ―その生涯と文学―

学位申請者 森本 穂

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 出原隆俊

副査 大阪大学教授 加藤洋介

副査 大阪大学准教授 斎藤理生

【論文内容の要旨】

本論文は「死の影のもとに―〈魔界〉の淵源」、第二章「新感覚派の誕生―文壇への道」、第三章「恋の墓標と〈美神〉の蘇生―自己確立へ」、第四章「戦時下の川端康成―自己変革の時代（一）」、第五章「戦後の出発―自己変革の時代（二）」、第六章「「住吉」連作―〈魔界〉の門」、第七章「豊穡の季節―通奏低音〈魔界〉」、第八章「「みづうみ」への道―〈魔界〉の最深部」、第九章「円熟と衰微―〈魔界〉の退潮」、第十章「荒涼たる世界へ―〈魔界〉の終焉」、第十一章「自裁への道―〈魔界〉の果て」、第十二章「五年後の「事故のてんまつ」」。それに「三十五年後の「事故のてんまつ」―虚実と「縫子」をめぐる人びと」からなる。

上下、A5判・各800頁。四百字詰め換算4000枚。

本論文は川端の主要作品を個々に解明し、その内面世界、生涯の軌跡を追究しようとする。

それにあたって、川端の〈孤児〉という問題を宿命と捉えることを基軸に、伊藤初代との出会いと悲恋、様々な人々との邂逅と別離、アジア太平洋戦争の深い傷痕、源氏物語をはじめとする日本の伝統的な文学・文化への傾倒を作品の重要な背後とする立場から、ほぼ全作品ともいえるほどの広範囲にわたって言及がなされており、各作品に関する先行研究にもできる限りの検討がなされている。その中でも、本論文のもっとも重要な論点は、川端がノーベル文学賞を受賞した際に言及した、一休の『仏界入り易く、魔界入り難し』という言葉である。このテーマから検証するときに川端作品が新たに照射されるとする。とりわけ、アジア太平洋戦争の後、川端の作品世界が突然に深まり、独特の〈美〉の世界を形成するに至ったのは、〈魔界〉という真の芸術家が遭遇する運命的なものであると主張する。

その立場から、「みづうみ」を川端作品の頂点と位置付ける。主人公の銀平が幼少のころから〈悲しみ〉と〈孤独〉と〈醜さ〉を抱え込み、自己の行為が道徳に反するという〈悪〉の悔恨を抱きつつも、地獄の底から、聖なる美少女を〈憧憬〉し続けるとこの作品を分析する。〈魔界〉を内蔵する作品としては、「住吉」連作、「千羽鶴」、「山の音」、「眠れる美女」、「片腕」、「たんぽぽ」などを挙げる。

川端の自殺当時問題になった「事故のてんまつ」についても、独自の観点から、新たな見解を示し、臼井吉見の「事故のてんまつ」の虚実も明らかにする。

## 【論文審査の結果の要旨】

本論文のタイトルには啓蒙的な出版物を思わせるものがあるが、そのような新書本などとは質量ともにはるかに一線を画する力作である。代表作の影に隠れ、従来は無視されがちであった作品の重要性を浮き彫りにするなど、数多くの作品に言及し、それぞれの先行研究も十分に視野に入れたものとして、川端研究における個人の著作としては類を見ないものである。その中で、有力な川端研究者の一人の、大戦中の川端がほとんど戦争というものを素通りしたとする見解に、正面から批判するなど、重要な議論も少なくない。何よりも〈魔界〉を軸として川端作品全体をトータルにとらえようとする強い意欲は高い評価に値しよう。〈魔界〉という言葉で川端作品を把握しようとするのは、従来にも見られなかったわけではないが、その由来から初めて徹底的に追及するものはこれまでに見られなかったといえよう。作家の人生と作品を総合的に捉え返し、全貌を明らかにしようとする姿勢も、細分化に堕しかねない現在の研究の潮流に一石を投じるものでもある。

また、源氏物語をはじめとする古典文学の影響の測定などについても、従来の水準を越えようとする意欲に満ちている。数多くの作品を対象としながら、個別の作品の枠を超えた表現や発想の類似性の指摘なども、作家の創作活動を縦断することで見えてくるもので、この著者の川端作品への深い傾倒を思わせるものであり、説得力もある。最新の研究を取り入れ、更新し、時に自説をも否定していく誠実さも特筆すべきであろう。

こうした中で、最大の問題は、作品の背後に常に作者の原体験を想定するという方法が根本的に抱え込む問題であろう。個々のテキストの構成・構造に関わる分析がどこまで徹底されているか、作品がその内部のどのような必然性によって立ち上がっていくのか、という視点がやや曖昧だと言わざるを得ない。何よりも〈魔界〉という論点について、〈作者〉と〈作中人物〉の関わりということが未分化で論じられているという側面も否定できない。また、この視点に固執するあまり、「ある人の生のなかに」を「凡庸な作品」の一言で切り捨てるようなことも看過できないし、極端に言えば「みづうみ」をストーカー小説とする捉え方に強く反論しきれぬかという問題もあろう。モデルとなった人物の実生活を類推するのに作品の描かれ方を根拠にする場合があったことも、論理が転倒しているように思われる。前衛芸術との関わりについても考察を深めるべきであったろう。さらに「住吉」連作を重視し、そこに『源氏物語』からの深い影響関係を見ること自体には問題はないが、『源氏物語』須磨巻に言及のある在原行平から、「私」が「行平」と命名され、流離漂白の物語が構想されたというのは、連想のレベルに留まるものであろう。生みの親と育ての親との二人の母という主題が、光源氏の実母桐壺更衣と藤壺に拠るといっても、そもそも光源氏が藤壺に対して「母」という意識を抱いていたと認定できるだけの材料がなく疑問が残ると言わざるを得ない。

このように、幾つかの、必ずしも小さくない問題点もあるが、総合的な到達度から、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。